HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然栽培が織りなすケアの場：農福連携を行う生活介護・就労継続支援B型事業所のエスノグラフィー [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	福島, 令佳
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15066号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85462
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Reika_Fukushima_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　福　島　令　佳

学位論文題名
自然栽培が織りなすケアの場：
農福連携を行う生活介護・就労継続支援 B 型事業所のエスノグラフィー

・本論文の観点と方法

本論文は文化人類学的に福祉にアプローチする「福祉人類学」の立場から、現代日本における福祉とケアを論じようとするものである。日本では障害者総合支援法に基づく障害者の就労継続支援の場として、その人たちが雇用契約を結んで働く事業所（A 型）と雇用継続を結ばずに軽作業などの就労支援を行う事業所（B 型）の区別がある。本論文ではより多様な障害者が利用する B 型事業所に絞り、その中でも自然栽培という無肥料・無農薬を特徴とする栽培方法に基づいて農福連携（障害者を農業の担い手とすること）を実践している事業所をフィールドとしている。著者は予備調査を含めると計 5 カ所、本論で主に扱われたものでは 4 カ所の B 型事業所で、4 年 8 カ月の期間、断続的にエスノグラフィック・フィールドワークを実施した。それらの現場に見られる独自の「ケア」を内側から描き出し、分析することが本論文の目的である。その際の理論的な視角として著者は福祉人類学におけるケア論、すなわち近代社会の文脈で通常となっている障害者ケアを相対化し、ケアの文化的多様性を見て行こうとする立場、および人類を他の生物種との関連で捉えるマルチスピーシーズ人類学を援用する。後者によって自然栽培の畑を舞台に展開される、支援者や障害者などの人間だけではなく、栽培植物と他の植物、それらが生育する土壌、そこに住まう昆虫や動物などを含めた多様な存在者の関わり合いの中で「ケア」を捉えようとする。

・本論文の内容

序章では、本論文で焦点が当てられる農福連携、および生活介護・就労継続支援 B 型事業所について説明すると共に、従来の障害者支援が抱える規範主義的な問題を指摘している。そして自然栽培に基づいて農福連携を実践する B 型事業所での予備調査で得られた、支援者と障害者（利用者）との関係性が従来の障害者支援とは異なっていること（「福祉っぽくない」）、そこでは障害者が「生き生き」としていて、よそ者である著者にとっても居心地が良いといった素朴な印象を出発点として、これらの事業所において実際に行われているケアの特徴、条件、それが生成するプロセスを明らかにするという研究上の問題を設定している。

第 1 部では、福祉人類学的研究におけるケアの主題化と研究目的について述べる。本研究では、ケアとはこうあるべきという規範主義的なアプローチに従うのではなく、記述的なアプローチによって、実際のケアの実践を描く立場をとる。そのための方法論として文化人類学を中心に発展してきたエスノグラフィーを用いる。そして福祉人類学の先行研究を踏まえて、本論文の観点として、規範主義的なケアを相対化しつつ、またケアする側の観点に限定することなく、ケアされる側の視点をも含めて広くケアを見ること、および人間以外の他の生物種や環境との関わり合いの中でケアを捉えるマルチスピーシーズ人類学的な視角を取ることの意義を論じ、自然栽培に基づく農福連携の現場において、どのような条件の下で、どのようなケアの実践が生成するのかを明らかにするという本論の目的を導き出す。

第 2 部では、調査の背景と概要について述べる。調査の背景として、自然栽培に特徴的な視点および、農福連携を行う生活介護・就労継続支援 B 型事業所の各フィールドを説明すると共に、それらのフィールドにおける調査の期間と方法、倫理的配慮について述べる。

第 3 部では、自然栽培を応用するケアの場において、規範主義的なケアがいかになされなくなり、また新たな関係性に基づくケアが生成しているのか、そしてその条件は何かを、具体的な現場の描

写に基づきながら分析する。この事業所では、支援者―利用者を越えて、栽培植物、土、微生物や虫などの人間以外の存在もケアの場を構成していることが明らかになった。こうしたマルチスピーシーズ的な関わり合いがケアのコンセプトを拡大する可能性を論じる。

第 4 部では、第 3 部で示した自然栽培的な条件の下で、いかなる文脈で、そこに独自なケアの実践とその関係性が生まれているのか、もしくは消えていくのかのプロセスを見ていく。支援者の障害に対する規範主義的で一方的な管理を追求する姿勢が、自然栽培に基づく農福連携の現場で、変化していく様子が、実際のフィールドワークを通して明らかになった。その場その場で条件が違い、多様な作業内容が作物や季節に合わせて出てくる自然栽培の現場では、支援者も障害者も共に栽培植物とその環境に身をもって関わることになる。場合によっては障害者の持ち味（根気強さ、生物への繊細な感性など）が「健常者」である支援者以上に、農作物の生育を促進することがある。こうした場では「支援者」や「障害者」の固定した規範は通用しない。むしろ作物とその環境をその都度いかに注意深く「ケア」するかが重要となる。従来の画一的な施設内での作業とは根本的に文脈が異なる現場で、規範主義的な関係性が次第にほぐれ、支援者―利用者―畑の多様な生物が互いに互いをケアし合う関係性が生じていく。

第 5 部では、自然栽培に基づくケアの場に約 4 年半にわたって関わってきた著者の、「自己」の変容をも含めたオート・エスノグラフィー的な記述を行う。大学で社会福祉学を専攻し、その後もその分野の専門職および教員として従事してきた著者は、内側から従来の障害者福祉の限界に直面してきた。その「自己」が、自然栽培に基づく農福連携の現場で身をもって経験することは、単に著者個人の「主観」の描写に留まらず、内在化された従来型の障害者福祉を再帰的に照らし出し、それとは違うケアを明らかにすることにもつながる。

終章では、これまでの調査と分析を通して述べてきた諸側面を総合して議論を行う。自然栽培とは、人間が栽培植物をコントロールする慣行栽培とは根本的に違った自然との関わり方を前提にしている。この非コントロール的、非管理的な関わり方が、支援者と利用者にも影響を与え、従来の規範主義的で管理を基調とする障害者福祉とは異なったケアを現出させていることが明らかになった。そこで顕著なのは、双方向的で多様性を尊重する関係性である。障害者を既存の画一的な作業に合わせるのではなく、個々の障害者の個性と畑におけるそのつどの多様な作業内容をマッチングさせることが重視される。土と生きものに触れるという日々の実践の中で、障害者ばかりでなく支援者の側も既存の枠組みから解放される。そこでは障害者―支援者―畑の多様な生物が互いにケアしケアされる、「共にケアする仲間たち」というべき関係性でむすばれる。この結論が「古典的障害者観」と「合理的配慮」などの障害者に関する概念に対して持つ含意を議論し、併せてこれらの事業所にも見られる制度的・経済的な問題点をも指摘する。

巻末の付録は季刊書籍『自然栽培』全 20 巻の内容分析である。限られたフィールドにおける調査を補足するものとして自然栽培に特徴的な世界観を理解する資料となっている。